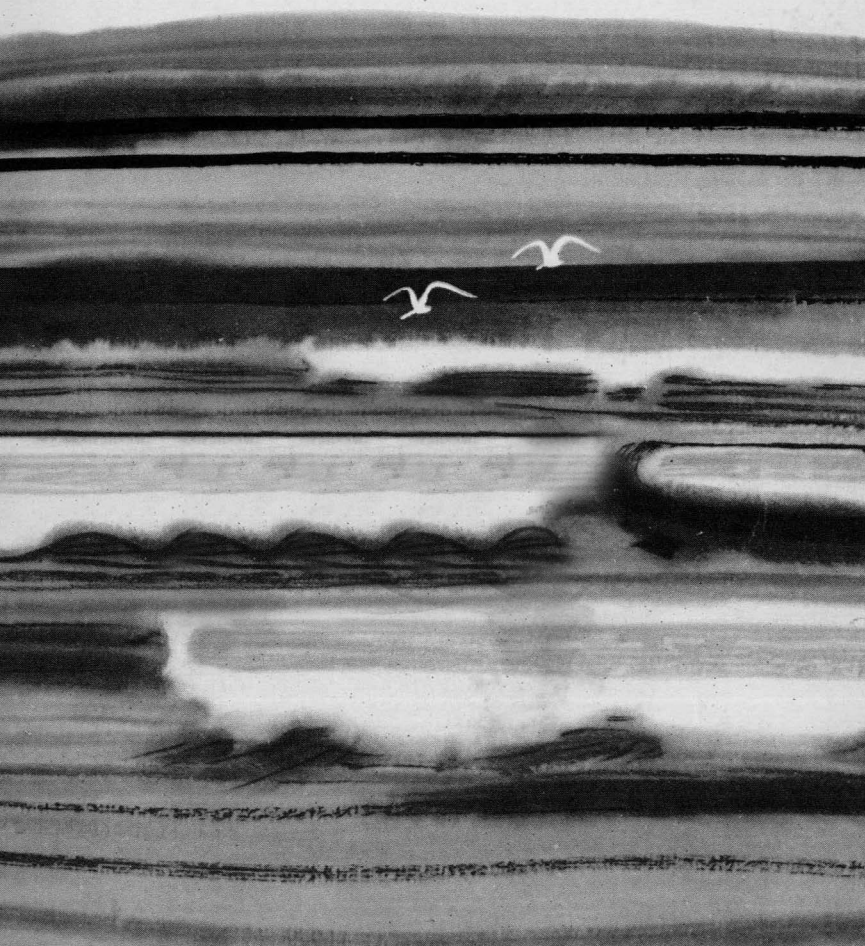


海賊商人

南條

海賊商人



昭和三十三年六月五日 印刷
昭和三十三年六月十日 初版發行 ©

定價二五〇円

海賊商人

著者 南條 範夫（なげ じょうのり おのぶ）

発行者 神吉 晴夫

印刷者 盛 英 信

印刷所 慶昌堂印刷株式会社
東京都文京区関口町一四〇

株式会社
光 文 社

東京都文京区音羽町三ノ一九
電話大塚(94)一一〇〇―一九
振替 東京一一五三四七

万一、落丁本、乱丁本がありましたら本社でお取りかえいたします。

(美行製本)

目 次

風浪の巻

落城	七
悲しき別離	二
海賊船	七
弟の行方	七
海の秃鷹の群に	四
待望の呂宋へ	三

美女の巻

変転	四
堺 <small>さかい</small> の悪奉行	五
めぐりあい	三
奇謀の勝利	六
商人の生活	五
闇の中の婚礼	四

南海の巻

修羅場……………九

ふたたび呂宋へ……………一〇

カリヨンの奸計……………一〇

海賊か商人か……………一四

拷問……………一三

女海賊来襲……………一七

邂逅の巻

恋の南国……………一三

邪恋の海賊……………一六

彌平次の足跡……………一四

海上の陰謀……………一五

仇敵スペイン船……………一五

船底の奴隸……………一六

帰国の巻

南海の漂流	一七三
なつかしの堺へ	一七九
納屋の復興	一八六
おつうの運命	一九九
悲しき再会	二〇〇
姐御のおらん	二〇七

雄飛の巻

海の呼ぶ声	二二三
呂宋助左衛門	二二九
太湖漁色	二三六
呂宋の壺	二三三
独裁者の怒り	二四〇
自由の海へ	二四六

海
賊
商
人

裝
幀
·
中
尾
進

風浪の巻

落城

流浪の將軍候補足利義昭をかつき上げた織田上総介信長が、二万三千の大軍をひきいて、濃州岐阜の城を落し、上京の途についたのは、永禄十一年（一五六八）九月七日である。

十二日には、早くもその先鋒である佐久間右衛門信盛、木下藤吉郎秀吉、丹羽五郎左衛門長秀の勢が、近江国蒲生郡の箕作城をひしひしと取りかこんだ。

箕作城の守将は、佐々木右京太夫承禎の一族吉田出雲守父子である。武者頭は、豪勇をもつてきこえた建部源八郎吉保。佐々木承禎がこもる観音寺の本城から後詰め（ゴヅツ）の兵が来るまでは、あくまで、織田勢を食いとめよと、かねて敵命を受けていたから、要害堅固に防備態勢をととのえて、待ちうけていた。

城攻めの始まったのは、十二日申の刻（午後四時）である。

強襲を得意とする佐久間右衛門が先陣を引きさうけ山を攻めのぼって大手の木戸に突撃すると、知謀の木下藤吉郎は、搦手にまわって息もつがせず牽制攻撃を敢行する。

建部源八郎吉保は、大手木戸を押し開いて打つていで、一たび、二たび、三たびまで攻撃軍を山下までしりぞけたが、味方の死傷百を越え、日もくれかかったので、ひとまず手勢をまとめて、城中へ引きあげた。

「見事な武者ぶりだった、しかし、敵勢もなかなか手ごわいな。」

水を含み、傷の手あてをしている建部吉保のそばに、守将吉田出雲守が近づいて、ねぎらった。

「されば、思いのほかやりおります。が、明日の夕刻までには、観音寺城からの援軍がまいります、それまでは、なんとしても防ぎとめてみせる所存。」

と言っているところに馳せよったのは、吉保の長子彌平太である。当年十五歳。父ににて年にしては、大柄な、白皙な少年である。

「父上っ。」

「おお、彌平太、どうだ、父の戦いぶり、とくと見ておったか。」

「はい、今度は、どうでも、私もお供をいたします。」

「はは、急ぐことはない、まだまだいくらでも戦う折はある、今日はこれで休みだが、明日は折をみて、初陣をさせてやろう。」

だが、建部吉保の、この約束は実行できなかった。

その夜のうちに、木下藤吉郎の潜入させた密使に懐柔された搦手の部将飯塚左京がねがえりを打って、敵兵を城内に導き入れたからである。

夜明け近く、三の木戸あたりにおこったはげしい擾乱に、本丸の部將たちが驚いて飛び出てみると、敵兵はもう三の木戸の内部一帯になだれ込んで、健気にもあくまで戦おうとしている一部の城兵が必死の反撃を試みているところであった。

たちまち、二の木戸をめぐるって凄惨な攻防戦が展開された。

夜のすっかり明け放たれたころには、すでに二の木戸もおおかた打ち破られた。

全身に、血飛沫をあげ、髪をさんばらに乱した建部吉保は、血刀をひっさげて、本丸にとってかえした。

「彌平太、彌平太。」

血走った目で、彌平太を呼び求め、走りよった悴の肩をぐいとかむと、大きな息に肩を上下させながらきびしい調子で、口早に言った。

「彌平太、落ちろ、彌平次をつれて、摂津へ、母の国へゆくのだ。」

「父上、いやです、私も、ここで死にます。父上といっしょに死にます。」

「ばかを言うな、落ちるのだ。小童一人でここで戦ったとてなんのたしになる。佐五兵衛をつける。西の木戸から山を伝って逃げろ、彌平次を頼むぞ、仲よう暮らせ！」

うむを言わさぬ鋭い声で、叩きつけると、彌平太のからだを、太い腕でぐいと引きよせ、二三度強くゆすぶってから、くるりと西の方へ向け、力一杯に突き放った。

「父上っ。」

と、彌平太が叫んだときには、もう吉保は、ふりむきもせず、矢さけびのますます高まる二の木戸の方へ走っていた。

追いかけようとする彌平太は、志村佐五兵衛しむらごべゑの手にがっしりとつかまえられた。

「待たれい。彌平次様はいずこにおらるる——おお、こちらへござれ、落ちるのじゃ。」

父の後姿を遠くからみて、走りよってきた弟の彌平次も佐五兵衛のたくましい腕に引きとめられた。切りむすぶ敵味方の兵たちの間をくぐって、西の木戸から樹間をつたって、のがれた。

彼らの落ちる姿をみて、加わってきた城兵たちが十数名になった。一団となって、どうやら、裏山に逃げ込んだ。

三上山みかみやまに近い小丘しょうきゆうの頂きいただで、秋空に低く血のような炎をはわせて、城が燃えているのをみた。

「父上は、あの火の中で死なれたのだ。」

十五歳と十一歳の兄弟は、思わず手をしっかりと握り合って、その場に立ちすくんだが、いつのまにか、二十名以上にもなっていた落人おちうとの一人は、一刻も早く危険地域を脱しようとして、二人をせき立てた。

摂津を志したのは、兄弟の亡き母が、摂州芥川せつしゅうあかたがわの城を守っている三好日向守みよしひなぐさ長頼ながよりの縁者だったし、

日向守の娘の津世つせと彌平太との結合が親同士の間、それとなく約束されていたからである。

城をのがれてから五日目、一行はどうやら芥川城にたどりついた。

三好日向守は、彌平太兄弟ちちうとを快く迎えいれ、建部吉保の最後の伝言を志村佐五兵衛の口から聞きとる

と、兄弟を慰めて、よしよし、わしに任せておけと、大きくうなずいた。

悲しき別離

彌平太は、数年前、父に連れられて上京したとき、管領細川の館で津世に会ったことがあったが、久しぶりでみるその目ざましい成長に目をみはった。

将来自分の妻になる娘ということは、はっきり言われたことはないが、だいたい悟っている。その津世が驚くほど美しくなっていたのはうれしかったが、それだけに、なおのこと城をのがれてきた自分の身の上が引け目に感じられた。

一つ違いの津世は、彌平太よりずっとませた心で彌平太を自分の定められた良人おとこと思ひ定めていたのであろう。

「彌平太さま、彌平太さま。」

と、その日から身近く付きそって、世話をやいてくれる。

父とわかれた流浪の心の切なさも、その優しい心づかいに、どうやら甘酸っぱい哀愁あいしゆうにかわろうとしていたとき、一通の書簡しょかんが、いっさいをひっくりかえした。

京から来たその書簡は、箕作城の守将吉田出雲守が、落城の最後のどたんばになって、織田勢に降伏したことを知らせていた。そのうえ、観音寺本城の佐々木承禎まで、織田勢に敵しがたいとみて城を開

け渡して石部へ落ちて行ったというのである。

「意気地のない連中だ、主君の佐々木も佐々木なら、部下の吉田も吉田だ。」

日向守は、ぎりぎり齒をかんでうなつたが、すぐに彌平太を呼んだ。

「彌平太、箕作城はおまえがたのがれ出たあとで、降伏したのだぞ。」

「えっ、そんなはずはありません。」

「これを読んでみるがよい。」

彌平太は、急いで手紙に目を通した。

「出雲守殿が降伏されたとしても、父上は断じて降伏なぞはしません。」

「ふん、守将が降伏してしまえば、誰がなんと言っても仕方があるまい。はは、おまえたちも、あわて逃げ出すことはなかったな、じっとしていれば、信長めが、足輕あしがらの先手まきぐらいにはかかえてくれただろう。」

そのときから、日向守の彌平太たちにたいする態度が、がらりとかわった。仇敵織田方へ降伏したやつの身内——という待遇なのである。

「この城にはおられませぬな。」

佐五兵衛が、彌平太にいった。

「うむ、私は父上がおめおめ降伏するようなことは絶対にないと思う。だが、ここでそれを争っても仕方がない。とにかく、ここにはいたくない、どこへでも出てゆこう。」

「能登^{ののと}の畠山^{はたけやまけ}家に、私のいささかの身よりがあります、そこへ行ってみましよう。」

城を退去すると申し出た彌平太の言を、日向守は、待ちうけていたように受け入れた。没落した佐々木家の部将、織田方へ寝返ったと思われる男の息子なぞに、自分の娘をやる気はさらになくなっていたのである。

日向守にむかって退去の意志表示をすると、彌平太は、津世を西^{にし}曲輪^{くわ}の櫓^{やぐら}の陰にいざなった。

「津世どの、おわかれをしなければなりません。」

「えっ。」

津世の白い顔が、驚きの色を走らせて、蒼空^{あおぞら}の青さを映した大きな瞳^{ひとみ}が、不安気にしばたいた。

——美しい。

彌平太は、今さらのように、このひととわかれるのをつらく感じたが、もう骰子^{さいころ}は投げられてしまったのだ。退去しなければならぬ理由を、彌平太は、はっきり説明した。

「わずか七日ほどの間でしたが、——あなたの御親切は忘れません。」

「親切なぞと——彌平太さま、私はあなたの妻になるつもりでございませぬもの、どんなことでもいたします。思いかえして城にとどまってくださいませ。」

「ありがとう、正直のことを言えば、私も、そんなことを夢みたこともありましたが、もうおしまいです。私のことは忘れてください。」

「いいえ、けっして忘れませぬ、父がなんと考えていようと、私はあなたの妻です。時節のくるまで、

いつまでもお待ちしております。」

生まれてはじめて耳にする甘美な言葉であり、しかも、生まれていらい、もっとも美しいと思った乙女の口から出た言葉である。彌平太は酒に酔うたもののように、目を輝かせ、頬を熱くして津世の耳にささやいた。

「本当ですか、津世どの、その言葉を本当と思って、あなたを妻に迎える日を期待していてもよいですか。」

「ええ、私はあなたよりほかの人のものにはなりません。」

若い二人は、若さだけのものもつ純粹な熱情で、堅く堅く将来をちぎった。

その翌朝、彌平太兄弟と佐五兵衛らの一団は芥川の城を退去した。

それから丹波を縦断して四日目に若狭国小浜に着し、佐五兵衛の才覚でようやく手に入れた舟に乗って、東北にむかって、舟の纜を解いた。その間、一行は、そんなはずはないにもかかわらず、絶えず、今にも織田勢の追求の手が自分たちの首を背後から押さえつけるような錯覚にとらわれていた。

「どうやら助かった！」

舟が沖へ出たとき、一同は、言い合わせたようにそういった色を顔に出し、緊張しきっていた顔面の筋肉をゆるめた。

だが、彌平太は、この逃亡の数日間に、多くのものを学んでいた。これからの自分たちの生涯が、けっしてなめらかなものでないだろうことを十分に覚悟させられていた。